鬼の花火

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の花火

【Nコード】

N13000

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

中学の頃、Y美には好きな人がいた。でもあの夏に、その人は引越す事になった。いつも身近だった彼に寄せた思いをどうしようと思った時、Y美の前に幻想からの来客が訪れた。

(前書き)

これは、秋の短編祭りの余韻が残っていた為に、ついやってしまった話です。

後、友達のリクエストからですかね？

とにかく、一度やってみたかったって奴ですね。

では、じっくりお楽しみくださいませ。

「はぁ・・・」

S田Y美は一人、祖父母の家の二階の部屋の椅子に座り、机に肘を乗せて、ため息をつきながら、外の景色をぼんやりと眺めていた。田舎ではあるが、比較的住宅に囲まれたこの家からの景色は、森と家が美しい調和を見せていた。

普通なら、見ていて気分がよくなるような景色であるが、彼女の心はどうやらもつと複雑な心境にあるらしい。

じつと悩んだ顔でいる内に、Y美の妹であるT子が、空気を読まず部屋のドアをガタンと乱暴に開けて、姉にちよっかいを出してきた。

「おいっす!!あれ?姉ちゃんどうしたん?外に蝉でもおるん?」

「T子・・・頼むから、今はほつといてよ。」

あしらうように対応したが、それで引き下がるT子ではなかった。

「えー?遊んでよ姉ちゃん、隣の猫ちゃんまだ帰ってきてないから、うち暇やもん。」

「知らないわよ、あんたの事情なんて・・・いいから、わしの事はほつといて。」

「遊んで遊んで遊んで遊んでーっ!!」

小学3年生のパワーは凄まじい物がある。妹のどたどたと言う音をとまなつただだと、耳が痛くなるような怒号の前に、Y美は耳を塞

がずにはいられなかった。

それが家中に響いたのか、下から二人の母の物らしき声がしてきた。

「ちょっと！！静かにしなさい二人とも！！」

母親として当然の物言いに、T子はおとなしくなって返事をした。

「はい。わかった！」

その後で、ここにいても仕方ないと判断したのか、T子そのままY美の部屋を後にした。

五月蠅いのがいなくなったのは、彼女にとって救いであったものの、それで悩みが消える訳ではない。

彼女の悩みは・・・もっと別の物であったのだから。

彼女が小学4年生の夏に、彼と出会った。

彼の名前はI山N男。彼女とは同じ年であった。

出会った当初、彼女は祖母の家の庭から、N男を見つけたのだ。

N男は隣の家の庭に一人、椅子に座ってぼんやりと空を眺めていた為、もちろん彼女の事など眼中になかった。

しかし、暇を持て余していた彼女は、ばつと家の柵を乗り越えて、N男の所に顔を見せたのだ。

こんな事をしてくれば、さすがにN男は彼女を無視する事など出来る訳がない。

不意の事だったので、N男は不思議そうな様子で、彼女が誰なのかを尋ねた。

「あの・・・君って誰？」

彼女は柵に腕を乗せたままで、彼の質問に答えた。

「わし？わしの名前はS田Y美。今年の夏一杯は、ここにいることになったんだ。よろしくね。」

素直な笑顔を向けられたN男は、面食らったものの、落ち着いた後で、自分の名を名乗った。

「俺の名前は、I田N男。俺も君と同じで、夏の間はここにいる事になってるんだ。」

「そうなんだ。だったら、明日からずっと会えるね。」

「そうだね。それはいいんだけど・・・」

気まずそうな調子になったので、Y美は少しだけ首をかしげた。

「何？」

「えっと・・・そろそろ柵から降りてきたらどうだい？」

少年の当然の問いかけに、少女は今気づいたという調子になって、少年のいる庭に降りようとしてきた。

「よいしょっと・・・」

しかし、態勢が危ういまままで降りようとしたので、案の定少女は態

勢を崩してしまった。

「わわわわ!？」

少女が態勢を崩し、少年のいる庭に落ちそうになった時、少年が自分の座っていた椅子からガタタと立ち上がり、落ちそうになったY美を寸前で受け止めたのだ。

少年の腕に抱かれて、少女は申し訳なさそうな調子と、照れた様子で、少年に感謝の意を示した。

「・・・ありがとうね。」

「・・・これからは、もっと気をつけて降りなよ。」

呆れた様子で、少年はY美に忠告した。

それが二人の馴れ初めであった。

それからの二人は、暇さえあればY美の方からN男の庭を覗き、もしN男がいれば、二人でたわいのない遊びを繰り広げていった。

田舎の祖父母の家では、どうにも近所の子とはなじみにくい所がある。だからこそ、二人はこの出会いをとても大切にした。

夏だけではなく、元旦などでも二人はよく遊んでいた。

小学生の間、少なくとも二人はあくまで友達同士でいた。

しかし、中学生になってから、少女の方に心の変化が訪れていたのだ。

異性としての彼は・・・思春期の少女にとって、あまりにも身近過ぎるものであった。意識するなという方が、無理という物である。

次第に彼女は、彼を友達としてではなく、一介の異性として認識していったのだ。

それもただの異性ではなく・・・恋の対象としての異性だ。

それを彼女が自分の中で理解した時、彼に対して、幼い時のように

接する事が出来なくなっていました。

彼は昔と変わらず、いつものように話しかけてくる。彼女はその隣で話を聞いているだけで、うわの空になり、頭はぼーっとなってしまう。

彼がいつもその事を彼女に問いただしても、彼女がその事を彼に説明できる訳もなく、ただ黙るしかなかった。

そんな状態が結構続き、いつしか二人は中学三年生になっていた。彼女の悩みは、思いを告げられない事だけではなく、彼の家庭事情から生まれた事に関してであった。

そう、彼は家の事情から自分の住んでいる場所を引越し、当分は祖父母の家にこれらなくなってしまうと言ってきたのだ。

永遠の別れではないものの、このまま思いを告げられないまま別れるのは、彼女にとっては辛すぎる物があった。

しかし、それでも一歩前に踏み出せる勇気が、今の彼女はどうしても出せなかった。

そんな事にひたすら悩んでいると、彼女のいる部屋の押入れから突然、ドツガアと何かが崩れたような音がしてきた。

「な、何々!？」

その音にびっくりした後に、彼女は音のした押入れを見た。

押入れ自体は閉まっているので、中を見る為には、押入れを開ける必要があったのだ。

「・・・」

しばらくその押入れを凝視した後に、彼女はそーっとその押入れに近づき、ガーっと開けた。

開けた先にいたのは、酔っ払い特有の酒臭さをかもしだし、一目でわかる・・・鬼の角を生やした幼女であった。

彼女は愕然とし、ただ言葉を失っている、その者がゆっくりと自分の眼を開けてきた。

「・・・・・・・・おはようさん・・・・・・・・」

のん気な調子と長いあくびをしながら、体を伸ばして寝ぼけ調子の声を出してきた。

その調子のままで、目の前にいるY美に話しかけてきた。

「え〜と・・・・・・・・あんだ、誰だい？」

意識の飛びかけていたY美は、どうにか意識を取り戻して応えた。

「・・・・あ、わし？わしの名前は、S田 Y美よ。あなたの名前は？」

「あたし？あたしの名前は、伊吹 萃香だよ。覚えときな。」

「で、あなたはなんで、この家の押入れの中にいるの？」

「押入れ？え？ここって押入れなのかい？」

きよろきよろと自分のいる場所を見た後に、戸惑った様子を見せてきた。

どうやらこの者、自分がなぜこうなったのか、まったく心当たりの

ない様子であったのだ。

Y美は目の前の得体のしれない者相手でも、不思議と冷静であった。

「……まあいいわよ、多分かくれんぼでもしてたのよね？」

Y美の問いに対して、萃香は随分とあほらしいといった様子で返してきた。

「かくれんぼだって？あたしは、そんな子供の遊びなんてしないよ。」

「子供って……あなた、いくつなのよ？」

「さあねえ……少なくとも、人間がいるより前には生きてたよ。」

人間がいるより……前？

Y美は目の前にいる者が言っている意味が、まったくわからなかった。

その者の容姿は、何処をどう見ても自身より幼いはずなのに、その者はあたかもとんでもない年月を長生きしてきたような発言をしていたのだから。

しかし、萃香の言い方には、その根拠のような物もまた混じっていた。

人間がいるより。そう、彼女は人間の姿をしているが、もし萃香が人間ではないと考えれば、実は合点もいく問題なのだ。だが……それはあまりにも非現実的な考え方である。

Y美もそれぐらいは思っていた。それでも……真相を突き止めるにはいられなかった。

「もしかしてあなたって……人間じゃないの？」

「ああ、そうだよ。あたしは鬼だよ。」

それを聞いた瞬間、Y美はショックと驚きから、思わず後ろにドタツと倒れこんでしまった。

「鬼！？鬼ってあの鬼！？」

声に出して、Y美は尋ねると同時に自己確認をした。

鬼・・・そう、Y美は自分がやっているゲームの知識から引用している鬼は・・・全て化け物であったので、目の前にいる鬼もまた例外でないと思い込んだのだ。

だが、目の前にいる化け物は、あまりにも人間臭いものであった。

「そうだ、あたしは鬼だよ。この角からわからないかい？」

自分の角をアピールし、これが鬼の証だという様子で示してきた。

Y美は倒れたままパニックになりかけたが、どうにか正気に戻り、立ち上がって萃香に受け答えをした。

それが出来たのも、目の前の化け物が、自分達人間に近い存在だと思えたからだ。

「なるほどね・・・で、そこにいる理由はわからずじまいなの？」

「そうだね・・・酔って迷い込んだとかなら説明できそうなんだが・・・ここはどうやら幻想郷じゃなさそうだね。」

あたまをぼりぼりとかき、困った様子を見せてきた所を見ると、本当にここにいる理由がわかってないらしい。

Y美は・・・割と真剣に悩んだ。目の前にいる者を・・・どうしよ

うかという事に。

このままほっておくべきなのか？それとも家族に話すべきなのだろうか？

ぐるぐると頭の中で悩みを回している内に、彼女はそれらの答えとはまったく関係のない事を話そうとした。

「あ……萃香ってすごく長生きしてるんだよね？」

「そっだよ。伊達な酔狂で生きてないね。」

「じゃあ……恋とかには詳しい？」

「恋い？へえ……恋ねえ……そうか、あんた、好きな人がいるんだね？」

「え？あ、いやその……そうじゃなくて……わしの友達にその……」

まったく隠せてない動揺を前にして、萃香はやれやれといった調子になったが、目の前の恋する者をほっとく事は出来なかった。

「まあいいよ、遠慮なく話しなよ。しっかりと聞いてやるからさ。」

「……うん……」

照れた様子が続けて、Y美は赤裸々に話し始めた。

少女説明中……

「……なるほどねえ。人間ってのはあたしより長生きできないから、気長に見るとかも出来ないからねえ。そんな事に悩むのは当然だね。」

「でしょ？でも……どうしても言えないのよ……その一言が……どうしても伝えたいのに……後一步って所で……言えないのよ……」

萃香には、彼女の悩みが……ひしひしと伝わってきていた。

鬼は普通、こんな事に関してはおろくに悩まない。惚れたはれたで悩む生き物ではない。

しかし、人間は違う。好きになつたからと言って、率直にそれが言える程、割り切れる生き物ではない。

それでも、思っただけはずっと心を締めつけてくる。

萃香もわからない事ではないのだが……他人の恋話と言うのは、彼女にとってそこまで興味の沸く話題ではない。

萃香はせめて、最低限の確認をしようとY美に尋ねた。

「そうか……で、いとしの彼ってのは、いつ会えなくなるんだい？」

「……明日の朝よ。」

「え？え？ええええ！？それ……マジで言ってるのかい！？」

「じよ、冗談で、こんな事言わないわよ！……」

顔を真っ赤にして、萃香に吼えた。

なるほど、彼女がそこまで悩み、思いつめていた理由は単純な物であった。

彼女には、もう時間が残されていなかったのだ。

萃香はてつきり、後何日かは機嫌があると思っていたのだが、ほぼ今日までと聞かされたのであれば、興味がないとはいえ、ほっておけるものではなかった。

「そうかい、じゃあ、最悪明日・・・いや、今日の夜には、その思いを伝えなきゃいけないねえ。」

「て、それが出来たら苦労しないわよ!!」

「はいはい、そりゃまあ当然だ。それぐらいはあたしにもわかるよ。だから・・・」

少し間を開け、萃香が自分の考えを打ち明けてきた。

「あたしがそれなりにいい雰囲気を、今日の夜に作ってやるよ。」

「え? どういう事?」

Y美の当然の疑問にも、萃香はあくまで真相を隠した様子で返した。

「まあまあ、とりあえずは夜になってからだよ。」

その日の夜、Y美は夕飯を家族と過ごし、今は・・・彼のいる家のインターホン前に立っていた。

さすがに中学三年生にもなれば、初めて会った時のような無茶が出る訳がない。

Y美は自分の中を動悸をどうにか押さえ、彼に会う為のボタンを・・・そつと押した。

ピンポンというありがちな音とともに、インターホンから・・・彼の声がしてきた。

「はい、誰ですか？」

しかし、度を越えて緊張していたY美は、その声の主が誰なのかわからなかったのだ。

「あの・・・S田と申します・・・あの・・・N男さんは・・・」

としどろもどろな状態で用件を言おうとした時、インターホンからの声がさっきのおとなしい調子から、大きく勇ましい物に変わってきた。

「ああ、Y美か!!ちょっと待ってくれよ!!すぐ玄関から出るからさー!!」

インターホンから、受話器をがちりとした音が聞こえた後、Y美はまだ出来ていない心の準備を始めた。

まあもちろん準備は間に合うはずがなく、意識も安定していない調子の中で、N男が玄関をガララと開けてきた。

「よう、Y美!!どうしたんだよこんな夜中に？」

手を振って、Y美に挨拶するN男。

男らしくなったN男は、Y美が初めて会った時とは大違いの様子であった。

たくましくなり、はつらつとした好青年になった彼。

一方のY美も、今はおとしやかな女性になっていた。まあおとしやかな理由は、緊張からのものであるうが。

Y美はしどろもどろになりながら、どうにか自分の用件を告げた。

「あの・・・この後・・・庭で・・・ちょっと話でもできないかな？」

「ああ、もちろんいいぜ。じゃ、行こうぜ。」

青年はY美の頼みを快諾し、そのつもりはなくても彼女の手を握って、庭までエスコートしていった。

Y美自身はもちろん拒む事もなく、王子様の手に引かれるお姫様のように、N男の手に導かれ、二人っきりのあの庭についた。

そこについた時に、N男が昔の事を思いふけり、Y美に話してきた。

「そついや、Y美に会ったのって、この庭が最初だったよな？」

「そうね・・・」

「あの時のY美、あの柵の上から落つこちてきやがってよお、俺が受け止めてなかったら、どうなってたかわかんねえなあ。」

「ごめん・・・覚えてないの・・・」

本当ははっきりと覚えているものの、恥ずかしくてそんな事言えはしなかったのだ。

「そっか、まあいいか。俺が覚えてればそれでいいか。はははは。」
おちよくった様子の彼の笑い声、いつものY美ならそこに突っ込みを入れるのだが、今日はそんな突っ込みを飛ばす事はしなかった、いや、出来なかった。
そんないつものやり取りよりも、彼女には訊かねばならない事があった。

「N男・・・もう、明日なんだよね？」

その一言によつて、青年の顔には何とか笑顔は残ったものの、少し重々しい様子になってしまった。

「ああ・・・そつだよ。父さんが左遷されちゃってさ、ここに来れるのも、多分今年の夏で最後になる。」

「そつだよね・・・仕方ないわよね・・・」

「まあ家族で決まった事なんだし、今更俺がどうこう言える事じゃねえや。」

少し楽しそうに語る彼を見て、少女は胸がつぶれそうになった。
もしかしたら・・・彼はわしの事なんて・・・そこまで思っていないのかもしれない・・・
それがもし真実なら、たとえ彼女が思いの丈を告げても・・・徒勞にしかならない。

Y美が次に言おうとした言葉に詰まった様子でいると、彼の手がそつとY美の下あご辺りに伸びてきた。

「さつきからどうしたんだよY美？何かあったのか？」

「！！！！！！！」

突然の事に、Y美はさつきまであった悩みすら吹き飛んで、頭の中がどうしようもなく真っ白になってしまった。

「い、いやいや！！なananでもないわよ！！ちよちよちよつと考え事してたらだからさあ・・・」

動揺しすぎて、ろれつもなく回らない有様に、N男はさつき笑った以上に笑った。

「ははははは、やっぱりY美は面白いよな。こうしていたら、よくわかるよ。」

面白い・・・やっぱりN男は、わしの事なんて友達ぐらいにしか思っていないのかな・・・

そんな不安が彼女の頭の中でぐるぐるとなっていて、その不安が少し和らぐような一言を、N男がボそりつつぶやいてきた。

「・・・ここに来れなくなったら、もうY美に会えなくなるな。それだけかな、ここに心残りがあるのはよ。」

今だ！！今言えば、もしかしたら・・・と思っても、Y美は当然踏み出せない。やっぱり踏み出せない。どうやっても踏み出せない。Y美にとって、その一歩がまるで地平線のような距離に感じられた。どうしよう・・・このまま、ずるずると友達のまま・・・終わっちゃうのかな・・・そんなの嫌だ！！
ただど踏み出せないその一歩。

その時であった。彼らの近くの空に・・・ドーンという音と共に、大きな花火が打ち上がったのだ。

「へ？」

「え？」

二人が一様に驚いていると、続けざまに花火が打ちあがっていったのだ。

今日は花火が打ち上がる予定などなかったもので、二人はなぜ花火が上がっているのか、まったくわからなかった。

だが、Y美だけは、その疑問の答えになりそう・・・思い当たる物があった。

あたしがそれなりにいい雰囲気、今日の夜に作ってやるよ

そう、萃香があのことだ・・・もしかしたらこの花火こそ、萃香の言っていた雰囲気作りなのかもしれないなかったのだ。

まあ断定は出来ないものの、思い当たる節と言えばそれぐらいしかなかった以上、Y美はその答えにいきついた。

そんな答えを導き出している内に、N男が花火に対して興味津々になっっていた。

「おい！！見ろよあの花火！！すっげえ、どこがやってるのかわかんねえけど、綺麗は花火だぜ！！せつかくだから、あの柵の上から見ようぜ！！」

N男の手がY美の腕を掴み、二人は柵の上にて、打ち上がる花火を眺めた。

「にしても……いきなり花火が上がるだなんてよ……びっくりしちまったぜ。Ｙ美はどうだった？」

「わしも……びっくりしたよ……」

事実、萃香自身は何も告げていなかった以上、驚くのは当然の事であった。

そんな時に、一際大きめの花火が鳴り響き、二人はそれに驚いてしまった。

「おお!!」

「きゃあ!!」

それを狙っていた……訳ではなからうが、驚いた拍子にＹ美は、とっさに＼男の腕にしがみついていたのだ。

「……」

二人の間にしばらく沈黙が訪れた後で、Ｙ美の方からどうにか口を開いてきた。

「……あの……ごめんなさい……いきなりでびっくりしちゃって……ねえ……もう少し……このままでいいかな……」

「……俺は……別にいいけどよ……」

いきなりの事に、＼男も照れくさそうな様子を見せてきた。

今だ……今なら、自然に言える……今なら自然に……

と思っても、実際は空回りし続けるばかり。じっと彼の腕にしがみ

ついたままだった。
そんなY美を察した訳でもなく、N男はいつもの調子で言ってきたのだ。

「なんやかんや言っても、Y美も女の子だよな。さっきのでよくわかったよ。」

「ほえ？」

「さっきのきやあつて声だよ。Y美からあんな声が聞けるだなんて、思いもしてなかったからよ。」

「N男・・・」

まあいい雰囲気になってきた頃合で、連続して上がっていた花火が突然途絶えた。

「お？もう終わったのか？」

そう思った瞬間、最後に大きな文字の入った花火が上がったのだ。その文字は、いびつな平仮名であったが、確かに読み取れた。そう、大好き、と。

これにはY美も焦らざるを得なかった。恐らくは萃香の配慮であろうが、ここの露骨にされてはびっくりせざるを得ない。

しかし、この花火を上げているのが誰かN男にわからない以上、N男は違う解釈をした。

「ははは、今時花火使って告白かよ。一体誰がやろうとしたんだろ
うな。」

その思いが誰に向けられているのか、Y美は黙ったままでいる事はできなかった。」

「・・・わしだよ。」

「は?」

「直接頼んだ訳じゃないけど、あの思いは・・・わしの思いだよ。」

「え?それってどういう意味だよ?」

そう尋ねた時、Y美は柵の上で立ち上がり、はつきりと・・・叫んだ。

「だからわしは、N男の事が好きなのよ!」

ずっと・・・ずっと自分の中で言えなかった気持ちを、Y美はようやくN男に伝える事ができた。

それだけでも、Y美にとっては満足だった。

「Y美・・・」

Y美の赤裸々な気持ちを、N男は自分の中で反芻していたその時であった。Y美が柵の上で態勢を崩して、柵から落ちそうになったのだ。そう、始めて会ったあの時のように。

「わわわわ!」

Y美が落っこちそうになったその時、N男が柵の下に降り、これまたあの時と同じように、Y美を受け止めたのだ。

その時と違う事と言えば、当時は不恰な受け止め方に対して・・・今は本当の王子様のように、お姫様だっこで受け止めていた事であった。

受け止められたお姫様は、当時とまったく同じ調子で、あの言葉を述べた。

「・・・ありがとうね。」

そして、N男もまた、同じように返した。

「・・・これからは、もっと気をつけて降りるよ。」

背丈や口調は変わっていても、二人は初めて会った時と・・・何一つ変わってはいなかった。

その態勢のまま、N男がさっきの事に・・・自分の答えを出そうとした。

「Y美・・・さっきの事だけどさ・・・俺は・・・お前の事・・・」

恥ずかしそうな様子で言おうとした瞬間、Y美の家の方から、Y美を呼ぶ声がしてきた。

「どうだいY美！！あたしの花火、いい感じだったろ！？で、ちゃんとあの事言えたか！？」

柵を乗り越えて顔を出し、空気が読めないとか通り越した萃香の発言と行動。

しかし、二人の様子を見たその瞬間、さすがに様子を察したようである。

「・・・ごめん、邪魔したね。」

見るも鮮やかな速さで、萃香はそそくさとその場を後にしていった。興がそがれたとかいうレベルではなく、二人のムードは文字通りぶち壊されてしまった。

「・・・」

黙ったままになるしかない二人。

もちろん、このまま黙ったままでいられる訳がなかった。

とりあえずY美はお姫様状態から普通の状態になり、N男もとりあえずな様子になった。

その後で、Y美はさっきN男が言おうとした事の・・・答えを聞くとした。

「N男・・・あの・・・さっきの事だけど・・・」

「Y美・・・あのさ、ちょっとだけ目をつぶっててくれないか？」

突然の事にY美は戸惑ったものの、言われるがまま自分の目を閉じた。

「じつ?」

と一応N男に確認した、その時であった。

Y美の唇に・・・暖かくて柔らかい何かが、そっと触れたのだ。

Y美は最初、それが何かまったくわからないまま、思わず自分の口を覆ったのだ。

Y美が目を開けた時、目の前には顔を真っ赤にしてそっぱを向いている・・・健気な王子様がいたのだ。

それを見た時、お姫様は、さつき唇に触れた物が何なのか……すぐに理解した。

それを理解した時、お姫様は王子様と同じぐらい顔を赤くしてしまった。

顔を赤くし、ぼーっとした様子の恋した二人。

やがて、お姫様の方から、そっぽを向いたままの王子様に、手を差し伸べたのだ。

「……ずるいよ、返事する前から、あんな事するだなんて……」

むすっとした様子で、王子様に自分の不満を告げた。

「……じゃあ、どうしたら許してくれるんだ？」

悪びれた様子のない王子様に、お姫様は王子様の顔を掴み、すっと顔を近づけた。

「……これで許してあげる。」

お姫様は、さつき王子様がした事を……そっとし返したのであった。

翌日、Y美は萃香がどこかに行っている事に気がついた。

お礼も何も出来ないまま、別れてしまった事を、Y美は少し申し訳ないと思ったものの、Y美にはもっと大事な事があった。

そう、N男の送り迎えである。

N男が家族の車に乗り、そのまま行こうとしたその時、Y美が寸前の所で間に合ったのだ。

Y美は必死に手を振り、N男も車の窓から、Y美に手を振り返した。二人の目には・・・涙が流れていた。

しかし、二人はもうただの友達ではない。愛し合う・・・男女であった。

二人はあの夜、誓いを立てたのだ。二人とも親から自立できた時に・・・まあ会おうと。

Y美はその誓いを胸に・・・青春を謳歌していったのであった。

幻想郷の博霊神社にて。

霊夢と萃香の二人が、いつものようにたわいのない会話をしていた。

「もう・・・一日どこかに行ってたから、すぐには帰らないと思ってたのに・・・また来たのねあんた。」

「おいおい、そんな邪険に扱うなよ霊夢。こっちはこっちで結構大変だったんだぞお？」

「・・・こっちは毎日面倒なんだけどね。あんただけじゃなくて、あんた以外の相手もしなきゃいけないんだから・・・」

「そうですかい・・・そろそろ霊夢も、身を固める事考えたらどうだい？人間の一生は短いんだからさあ。」

「・・・うるさい！！そもそもこの幻想郷に、私と釣り合う男なん

ていないわよ!！」

「そうだねえ。霊夢を嫁に貰おうだなんて、だーれが思うだろうねえ。こんながさつでこわーい巫女さ……」

といい続けようとしたが、霊夢の怒りの弾幕が萃香に飛んできた。

「……散々言わせておけばぁ……好き勝手言ってくるわね!」

「あ、やっべえ、これは逃げるに限るね。」

すたこらさつさと、その場を逃げ出す萃香。

「待ちなさい、萃香ぁ!！」

それを霊夢は、全速力で追いかけていったのであった。

鬼の花火 FIN

(後書き)

後書き

澄田

「……」

リグル

「あれ？どろしたの澄田？いつになくぼーっとして。」

澄田

「いや……なんでもないよ……」

リグル

「どうでもいいけど、この話に出てくる子、澄田に似てない？」

澄田

「!?!?!」

リグル

「感じとか一人称とかさあ……まあ口調はちよつと違うけど。それに、S田Y美って、直したら澄田康美になるかもしれないじゃない。いい。」

澄田

「ち、違う!?!S田Y美ってのは、シルベス田 ヨガ美って意味だから!?!」

リゲル

「ふうん……（超うたぐった視線）」

澄田

「……もう！！本音言えばいいんでしょ！？そつだよ！！これは作者の実体験が元になってるんだよ！！」

リゲル

「やっぱりね。でも実際はどこまで違うの？」

澄田

「……萃香に会わなかった事と、肝心のラブシーンっす……てか告白も出来ませんでした……」

リゲル

「それじゃ、ほとんど妄想の段階じゃない。」

澄田

「う、うっせえ！！勝手にしてくれ！！どうせ自己満足の塊なんだからよ！！作中でも言ってたたる！？後一步が踏み出せなかったって！！！」

リゲル

「へえ、澄田ってリアルじゃそんな純情キャラだったのね。」

澄田

「う……つるさいつるさいつるさい……妄想でぐらいい、こつなればよしと思ってもいいじゃねえか！！！」

リゲル

「……とりあえずだけども、現代入りにしても、ちょっと萃香の活躍とか地味じゃない？」

澄田

「いやいや、許可もなしに花火打ち上げてることか、普通だったら凄い事じゃなくね？」

リグル

「それもそうかもしれないけど……ちょっとねえ……」

澄田

「ままま、もつと本格的な現代入りも考えれるかもしれないから、今回はここまでにさせといてちよーだい。」

リグル

「あつそ……」

澄田

「それじゃ、最後の挨拶いってみよー。」

スペシャルサンクス

S 田 Y 美 様

伊 吹 萃 香 様

S 田 T 子 様

S 田 の 母 様

I山N男 様

博霊 霊夢 様

とりあえず、こんな見てて死にたくなるような駄文をお読みいただき、真にありがとうございますm(_____)m

by 澄田 康美

P.S、恋をしたくなる今日この頃。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1300o/>

鬼の花火

2010年10月14日12時46分発行